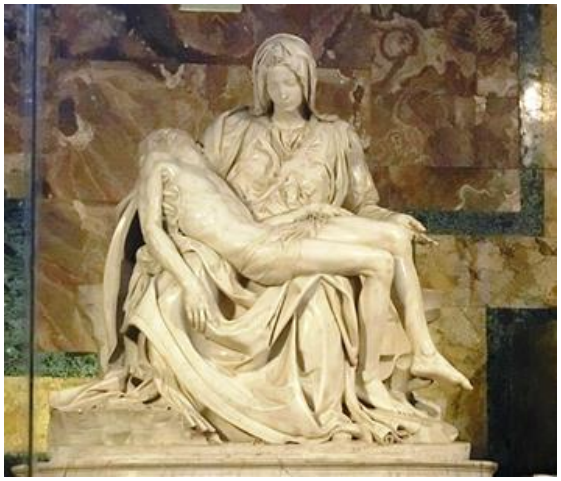
2019 年

アンドレア師のキリスト教美術史講座　受講ノート　V

in　船橋学習センター「ガリラヤ」

from 蕨由美の Facebook



受講ノート 2019　　From 蕨由美の Facebook

アンドレア師のキリスト教美術史講座

In　船橋学習センター「ガリラヤ」

2019 年 1 月 16 日

今日の午前中は、船橋学習センターガリラヤで新しく始まったアンドレア師の「ミケランジェロの彫刻と聖書」の講座を聴講してきました。

ミケランジェロ（1475～1564）の作品の多くは未完成であり、完成作品は少ない。生涯「人生の意味を問う」作品に挑み、その背景は「詩編」8 章でした。

「あなたの天を、あなたの指の業をわたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう、あなたが顧みてくださるとは。」

神に僅かに劣るものとして、その被造物を従えた輝かしい人間はまた、「ヨブ記」では、不幸のどん底で、神に問いかけるものでもあった。

「わたしたちの主よ・・・もうたくさんだ、ほうっておいてください。わたしの一生は空しいのです。 人間とは何なのか。なぜあなたはこれを大いなるものとし、これに心を向けられるのか。」

ミケランジェロの作品は、そのような人間と人生の意味を深く問う作品であったとのこと。

彼のフィレンツェでの初期の作品は『ケンタウロスの戦い』（1492 年頃）。その後のピエタを完成させるが、古代ローマ帝国の遺跡から見つかった「ラーオコオーン像」に感銘を受け、その影響はシスティナ礼拝堂の壁画「最後の審判」へとつながっている。

また、古代のベルヴェデーレのトルソーの肉体美もミケランジェロを魅了し、「瀕死の奴隷」像や「反抗的な奴隷」像はその影響による作品。さらにアカデミア美術館に残された未完成の「奴隷」像 4 作品へと発展していった。この 4 作品は青年期から死に至るまで人生の意味を深く問う作品であるとのことでした。

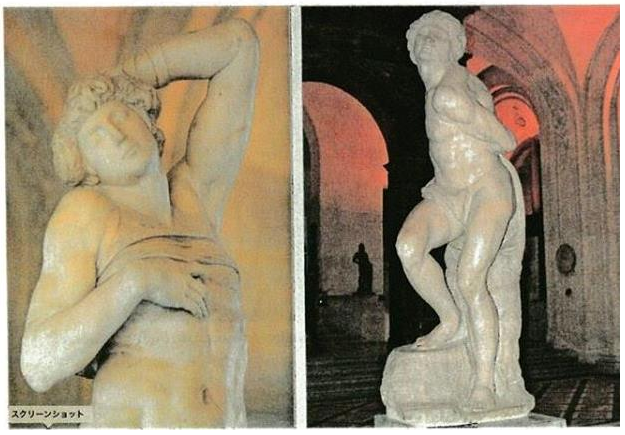
『ケンタウロスの戦い』（1492 年頃）

システィナ礼拝堂の壁画「最後の審判」

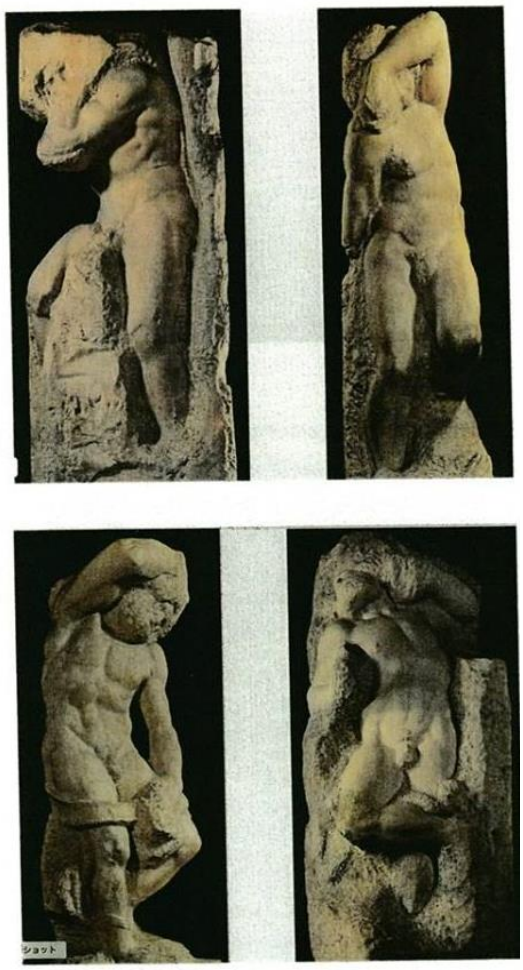
Torso del Bel Vedere,アポロニオス・オブ・アセンズ、1世紀、バチカン美術館

2.『瀕死の奴隷』『反抗的な奴隷』(1513 年 - 1515 年) ルーヴル美術館(パリ)

古代ローマ帝国の遺跡から見つかった「ラーオコオーン像」



奴隷 (1525~1534)、アカデミア美術館（フィレンツェ）



2019 年 1 月 30 日

今日は、船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア師の講座「ミケランジェロの彫刻と聖書」を聴講してきました。

今回とりあげられたミケランジェロ作品はサン・ピエトロ・イン・ヴィンコリ教会の「モーゼ像」とフィレンツェのアカデミア美術館の「ダビデ像」。

モーゼが山で神を対話していた不在の間に、「金の子牛像」を造り、崇めて踊っていた。それを見たモーゼは「怒りに燃え、手からかの板を投げうち砕く」（出エジプト記 32-19）。

このモーゼ像は、山で神からいただいた契約の石板を投げる直前の苦悩の姿です。

神は自分に似せて人を作ったが、人間が神の姿を作るのは冒涜であり、神の超越的な存在を具象的に表現することは、ユダヤ教やイスラム教では許されない。しかし、人間には、見える形での具体的な「イメージ」が必要であり、またイエスという人間となった御姿を見せてくださったことから、十字架上のイエスやマリアを描いたイコンが生まれた。問題は、人間がお金によって「神」をコントロールする危険をはらむということ。民に「金」を出させて造られた子牛像は、その危険性を物語っているとのことでした。

ところでモーゼの頭に角がある謎、これは「あなたの上に神の栄光を見た」というのが正しく、ヘブライ語で「栄光」が「角」と同語であったために誤訳されたのが原因であったらしいです。

ダビデ像は、ゴリアテと戦う決意もって戦闘に臨む前の姿で、サウルから与えられた鎧と武器を脱ぎ、石投げのみを持つ。ベルニーニ作の投石した瞬間や、ドナッテロの打ち負かした後とは、対照的な姿です。

「サムエル記上」の英雄的ダビデは、「サムエル記下」では、家臣の妻バト・シェバを奪ってその家臣を死に至らしめるが、ナタンに諫められ、自らの罪を悔いる王として記述されていました。

3 年前の 2016 年夏のアンドレア師と一緒にイタリア旅行で見たミケランジェロとベルニーニのダビデ像を思い出しながら、ヨーロッパの子供たちは、少年ダビデの活躍を昔話やアニメのように楽しんで育つのかしらと思いました。

モーゼ像の解説＝神の石板を持つ右手、そして大理石と思えないような柔らかな感触思わせる長いひげ。怒りの寸前の思い悩みの表現がすばらしい。

モーゼ像　　頭は角をもつ。

ゴリアテに立ち向かう決意の表情のミケランジェロのダビデ像

ダビデ像　2016 年 6 月 7 日、フィレンツェのアカデミア美術館にて、撮影

ベルニーニのダビデ像は、投石した瞬間の動きを表現

ドナテッロ のダビデ像

ベルニーニのダビデ像

2016 年 6 月 12 日　ローマのボルゲーゼ美術館にて

2019 年 3 月 20 日

今日は朝から、船橋学習センター「ガリラヤ」へ、アンドレア・レンボ師の講座「ミケランジェロの彫刻と聖書」の最終回を受講に行きました。

今回のテーマは、ミケランジェロの晩年の未完成のピエタ 3 作品でした。

ミケランジェロのピエタは、1.『サン・ピエトロのピエタ』(1498 年 － 1500 年)、2.『フィレンツェのピエタ』(1547 年？)、3.『パレストリーナのピエタ』(1555 年？)、4.『ロンダニーニのピエタ』(1559 年) の 4 作あり、前回のテーマの 1. のピエタは若き日の大傑作、他は晩年の苦悩と思索の過程を物語る未完成作品です。

2.『フィレンツェのピエタ』はミケランジェロの自らの墓のための彫像で、1. とは異なり大理石の質は悪く、途中で自ら破却したが、弟子が手を入れたとのこと。

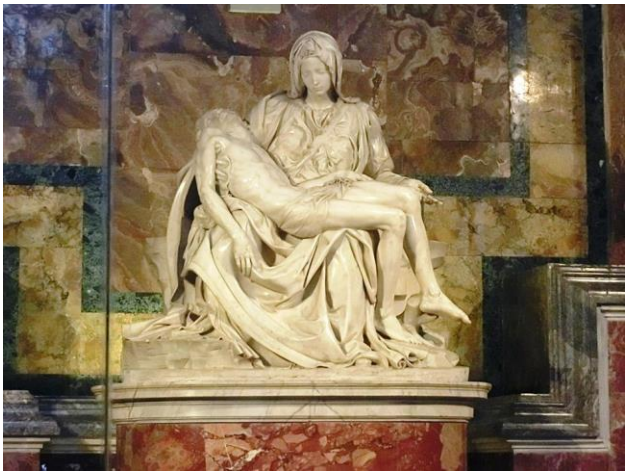
イエスの亡骸を支えるのは、ミケランジェロの自画像のニコデモ。後で支えようとするマリアはイエスと一体化しようとしている。左の人物はマグダラのマリアで、古代ローマの様式に近く、弟子が後に彫ったため、異質な像。

ニコデモは、当時、十字架刑の罪人は埋葬を禁じられていたが、ピラトに申し出て丁寧に埋葬を行った人物である。ヨハネ書の「夜」のイメージの暗い作品であるが、作者は自身の人生を、人間の信仰の歩みを指す「求道者」であったニコデモに託したのであろう。

3.『パレストリーナのピエタ』は一転して明るいイメージ。中央のマリアはイエスを支え後ろの愛弟子の肩を抱く。重く表現されたイエスの体は、マリアと一体化され、母の胎内に戻っていくようである。

4.『ロンダニーニのピエタ』は、やさしい彫り方で、イエスと一体化したマリアは、イエスを見ていない。土の下のイエスの足は、「人はちりであり、ちりに還る」ように柔らかに溶けていくよう。人間の暴力で人間性を失った存在をマリアが支えていると同時に、イエスがマリアを背負い、共に苦しみを支え合っている。未完成のこの作品は、完成された完璧な作品でもある。

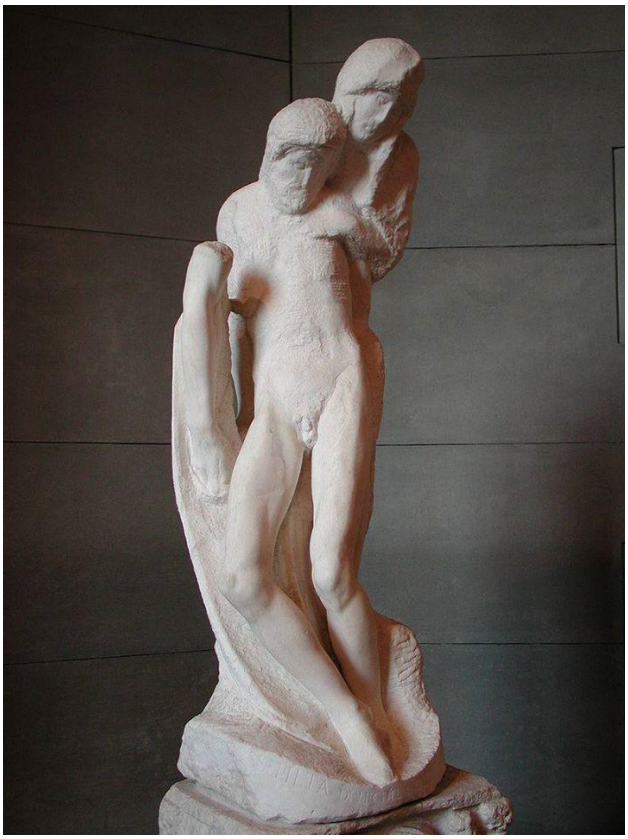
以上が、私が印象に残った講座の内容の一部です。



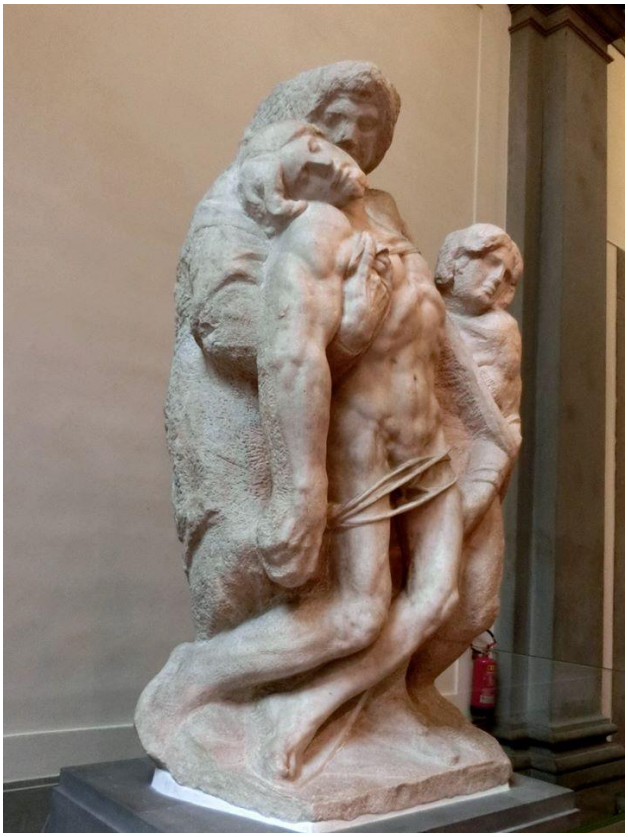
1.『サン・ピエトロのピエタ』

2.『フィレンツェのピエタ』

3.『パレストリーナのピエタ』



4.『ロンダニーニのピエタ』



3.『パレストリーナのピエタ』　横から撮影

2019 年 6 月 5 日

今日午前中は、船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア・レンボ師のキリスト教美術講座を聴講に行きました。

講座は、まずは、5 月にミラノ会総会のためバチカンに行かれた際に、フランシスコ教皇様に謁見されたことのおみやげ話から。

教皇はコンクラーヴェ用宿泊施設であるサン・マルタ館で生活され、バチカン宮殿に「出勤」されて謁見や執務をされておられるとのことで、宮殿の謁見用の非公開の部屋の様子や謁見の際の会話など、興味深いお話が聴けました。

教皇と 2 分間手を握られたまま、お話したそうです。

2 か月ぶりの講座再開でした

教皇謁見前のアンドレア師

今回の美術講座の 3 回シリーズのテーマは「神の救いと芸術」。バチカン宮殿の中の教皇専用の「Cappella Redemptoris Mater」（償い主の母礼拝堂）のモザイク壁画についてでした。

この礼拝堂は、1996 年ヨハネパウロ 2 世の 50 周年記念に枢機卿団から、旧 Matide 礼拝堂を改装して贈られたものとのこと。

教皇個人とごく親しい方々が日常のミサを奉げるチャペルで、司祭は「天の都」を背に祭壇に立ち、正面に「イエスの再臨」、右壁に「イエスの受肉と復活」、左壁に「イエスの昇天と聖霊降臨」、天井中央に「救世主イエス」がモザイクで描かれています。

このうち、ビサンチン様式のモザイク壁画「天の都」は東方教会の作者により、他は、現代の芸術家マルコ・イワン・ルプニック（Marko Ivan Rupnik）による作品です。

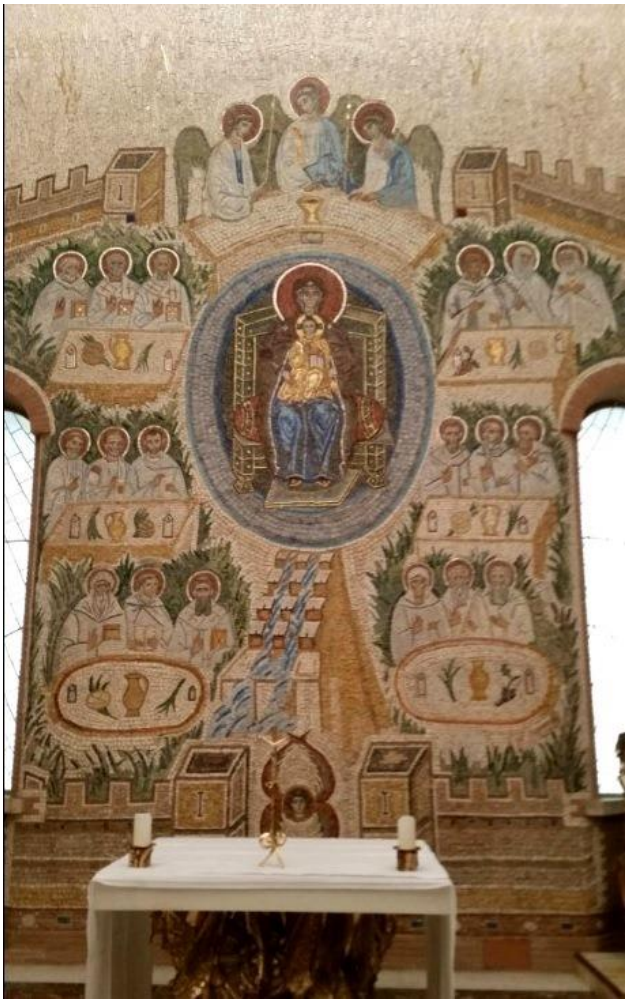
現代のカトリックの重要な教えを伝統的な手法で表現しているこの壁画について、今日は簡単な紹介で、次回から、その内容を詳しく教えていただけるとのことでした。

最後に、美術を通して神を仰ぎみて一体となることの意味を「コリントへの手紙第 2 の 3」を引用されて今日の講義を締めくくられました。

「主の方に向き直れば、覆いは取り去られま

す。・・・主の霊のおられるところに自由があります。わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。」

「Cappella Redemptoris Mater」(償い主の母礼拝堂)の壁画の説明



東方教会の作者によるビサンチン様式のモザイク壁画「天の都」

左上:「天の都」、右上:「イエスの受肉と復活」
左下:「イエスの昇天と聖霊降臨」、右下:「イエスの再臨」
中央:天井のキリスト像

「イエスの受肉と復活」
マルコ・イワン・ルプニック（Marko Ivan Rupnik）作

「イエスの再臨」
マルコ・イワン・ルプニック（Marko Ivan Rupnik）作

アンドレア師「鏡のように聖なるイメージの姿を見ながら、私たちも神の似姿になる」

2019 年 6 月 19 日

今日は午前中、アンドレア・レンボ師のキリスト教美術講座を聴講に、船橋学習センター「ガリラヤ」へ。前回に引き続き、バチカン宮殿の中の教皇専用の「Cappella Redemptoris Mater」（償い主の母礼拝堂）壁画のうち、「天の都」のモザイク画の内容がテーマでした。

「Cappella Redemptoris Mater」は、1999 年、ヨハネパウロ 2 世叙階 50 周年記念に献堂された礼拝堂で、ビサンチン様式の壁画「天の都」はオルトドックス（正教会）のモザイク画の作者により、他の三面は、現代の芸術家マルコ・イワン・ルプニック（Marko Ivan Rupnik）による作品です。

「天の都」の壁画は、入口から正面の祭壇奥で、教皇がミサをあげる際は、教皇の背後の壁画になるとのこと。第二バチカン公会議のエキュメニカルの精神を強く意識し、正教会の伝統的な様式で構成されています。

壁画の構図は、黙示録 21 章に示された「聖都エルサレム」イメージの城壁と門が廻り、中央上部には、アンドレイ・ルブリョフによるイコン「三位一体」のモチーフ、その下に聖母子像、そしてその下から「恵みの水」が流れ、城壁の正門に「ケルビム」が描かれています。

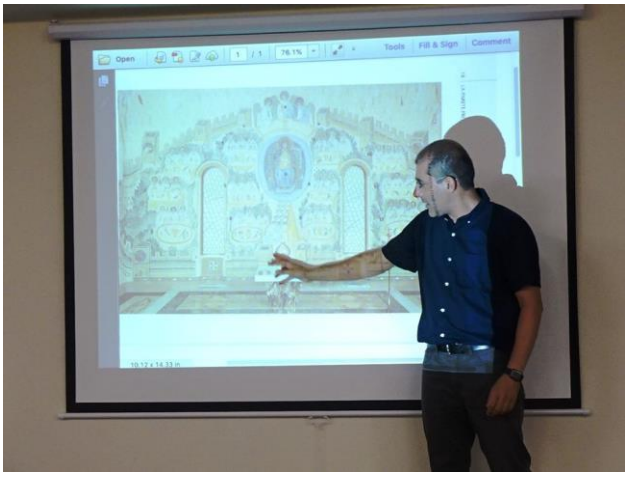
「ケルビム」は創世記 3 章 22～24 に出てくる「命の木の道を守る」ための「神の力」をしめすそうです。（主なる神は言われた、「見よ、人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るものとなった。彼は手を伸べ、命の木からも取って食べ、永久に生きるかも知れない。」～中略～神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道を守らせられた。）

最後に、現代のエルサレムの街の写真での解説。

ユダヤ教とイスラム教、カトリック、正教会の聖地が共存する都ですが、二千年前のイエスが歩いた道は地下 25m 下に埋まっているそうで、長い歴史を感じさせられました。

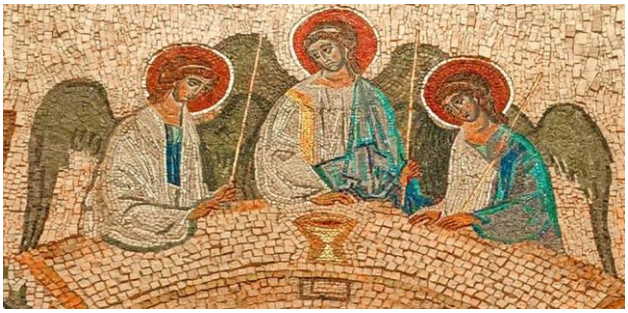
村上さんの司会でスタート

三位一体のモチーフ

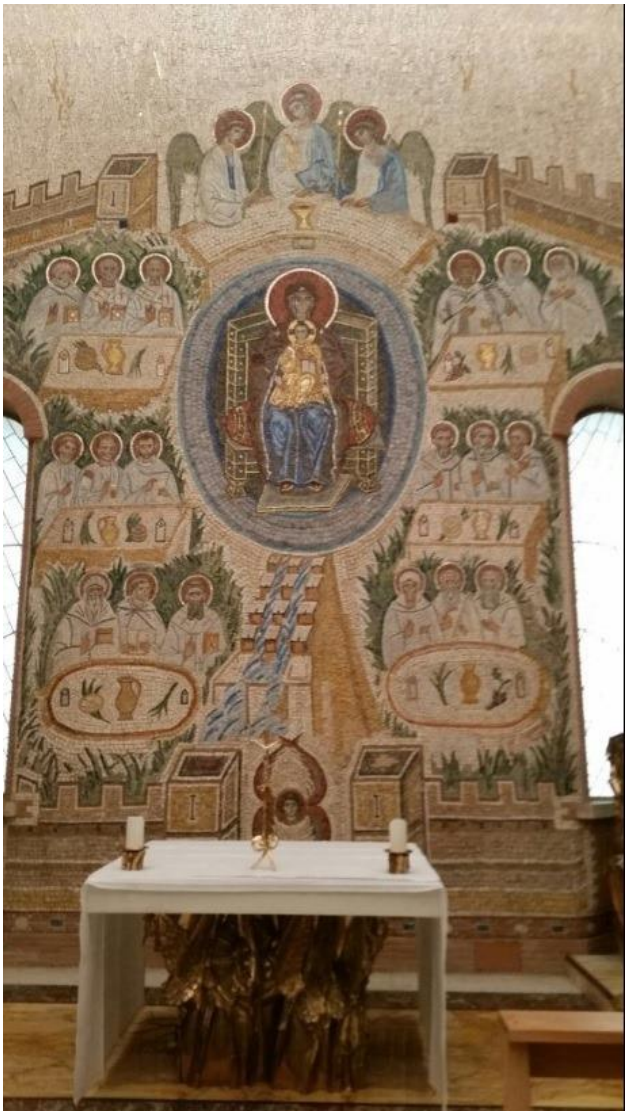


「天の都」の壁画について

「天の都」の壁画全体

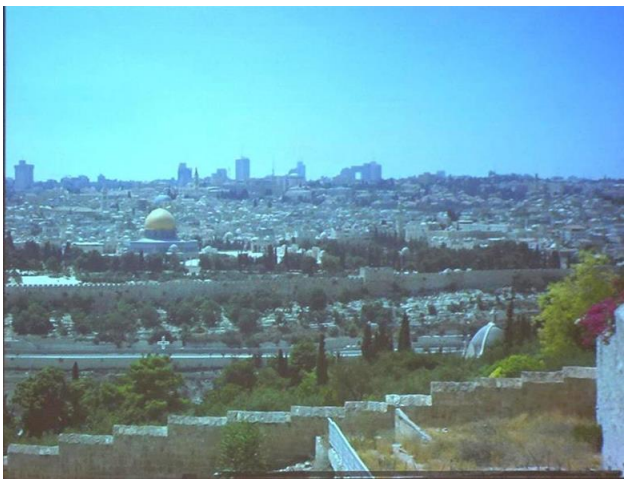


アンドレイ・ルブリョフによるイコン「三位一体」



祭壇の奥の絵が「ケルビム」

「ケルビム」が描かれている「聖なる門」



伝統的なイコンの聖母子像

伝統的な「ケルビム」の絵

2019 年 7 月 3 日

今日は、船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア・レンボ師のキリスト教美術講座の「Cappella Redemptoris Mater」(償い主の母礼拝堂) 壁画シリーズの 3 回目。現代の芸術家マルコ・イワン・ルプニック (Marko Ivan Rupnik) による作品のうち、右壁の「イエスの受肉と復活」についてでした。

それは、「キリストは、神の身分でありながら、・・・かえって自分を無にして、僕の身分になり、・・・人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました」という「フィリピの信徒への手紙」(2-6～9) に書かれたイエスの生涯を表わしています

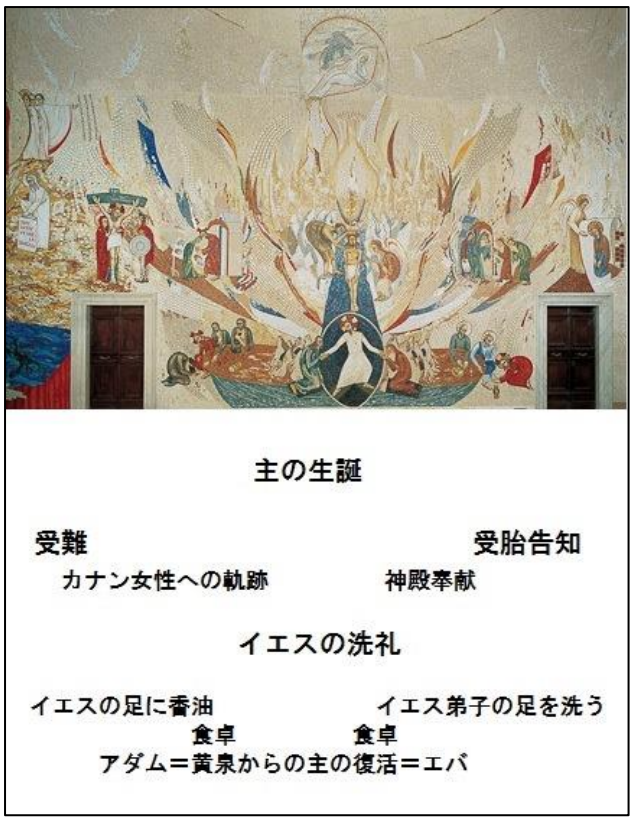
構成は、受胎告知・生誕・神殿での奉献・洗礼・カナンの女の娘を癒す奇跡・十字架での死、そして最下段に黄泉から復活するイエスとその手をとるアダムとエバ、食卓の左端は足に香油を注がれるイエス、右端は弟子の足を洗うイエスとなっています。

地上世界から神の神秘を表わす上部へフェードアウトしていくように薄くなっていき、「生誕」のみがその最上段に、古いイコンの意匠で淡く描かれています。

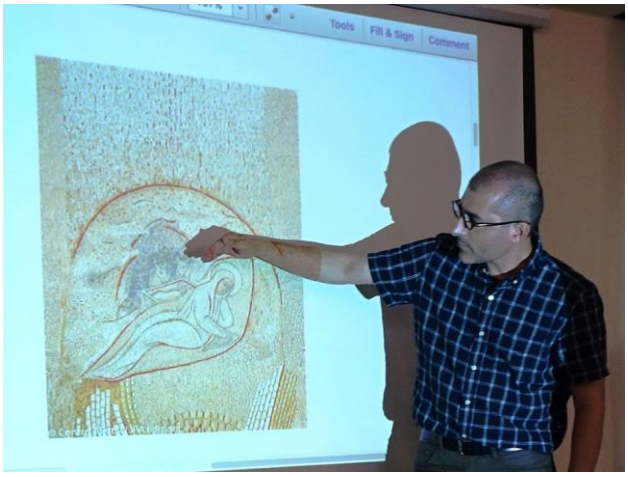
宣教活動のエピソードでは、マタイ伝 15 章のカナンの女の信仰に応えてその娘の病を癒す奇跡のみ。それは布教の初め、イエスは「イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい」(マタイ伝 10 章) と命じ、異邦人を対象としなかったが、異邦人のカナンの女の「小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」という切なる願いに、その信仰心をかえりみるという話です。特に異邦人への布教と救済に踏み出したこのシーンについては、アンドレア師は、イエスの生涯には「人間」としての成長過程での変化があること、そして現代の全世界へ宣教の意味を表わしているとのことでした。

次回最終回は、左壁の「イエスの昇天と聖霊降臨」についてで、これも楽しみです。

上へと、色彩がフェードアウトするのは、見えない神の神秘の世界になっていく壮大な構図



各テーマを復習して入れてみました。



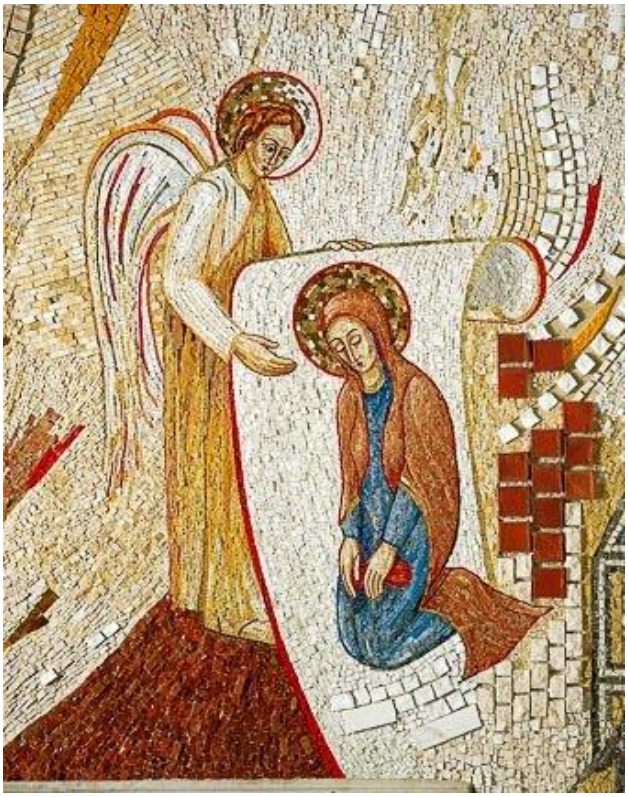
古いイコンのデザインで描かれた主の生誕

イエスの置かれた飼い葉おけは「棺」でもある。

岩屋では牛とロバが赤子を見守る。牛はイスラエル、ロバは異邦人を意味した。

左上は、カナンの女の「小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」という切なる願いに、その信仰心をかえりみるという話

カナンの女と、落ちたパンくずを食べる犬



受胎告知

古いイコンの伝統で、マリアは、赤い糸をつむぎ、懐妊を表わす

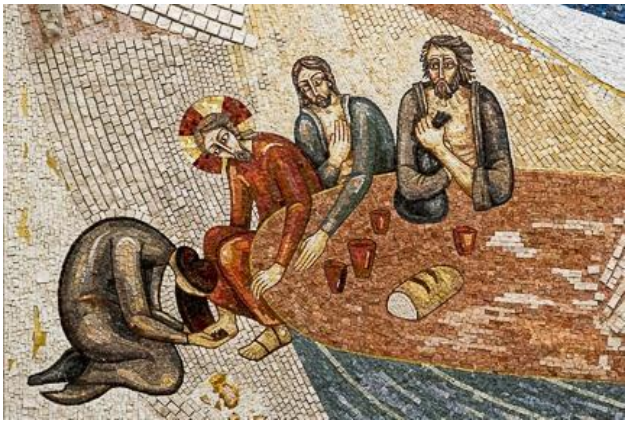
神殿に初参りする聖家族。

モーゼの掟とイスラエルの風習を守っていた。

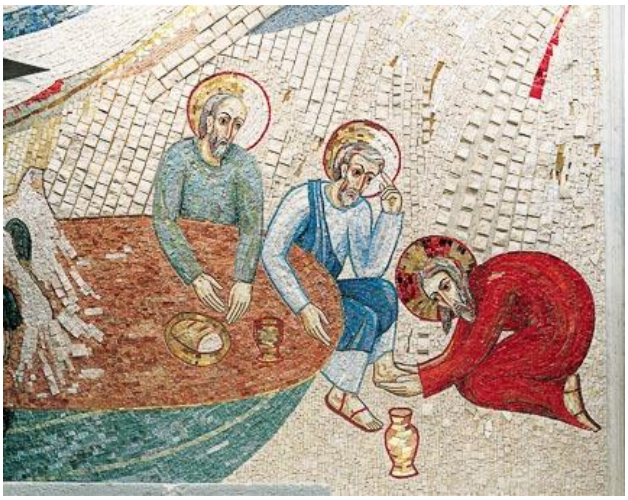
洗礼を受けるイエスは、また死によって黄泉の世界へ。

復活したイエスの手を、アダムとエバがとる。

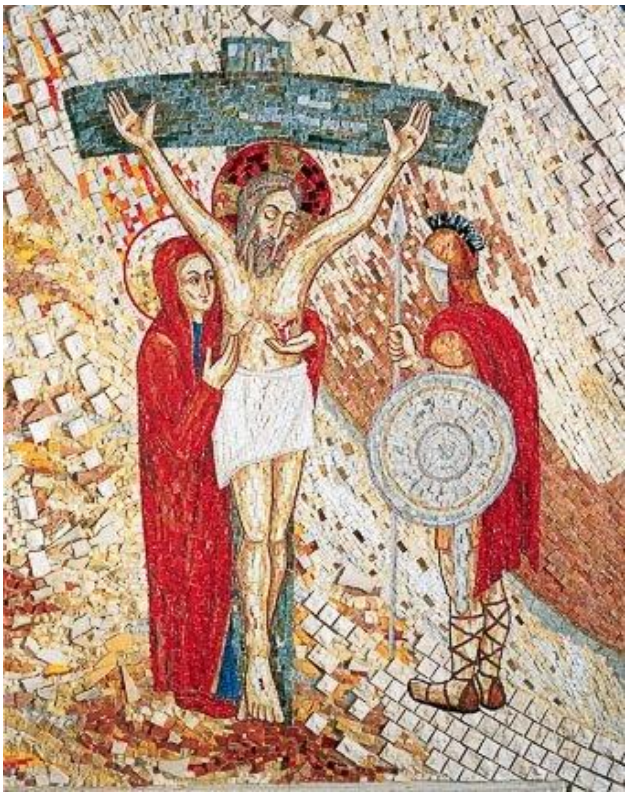
ミサでは、かならず死者の追悼をするのは、この信仰による。



イエスの足に香油を塗り髪の毛で拭うラザロの家のマリア



ヨハネ伝の最後の晩餐で、僕として弟子の足を洗うイエス



「十字架の死に至るまで従順でした」

2019 年 7 月 17 日

今日は午前中、船橋学習センターガリラヤでのアンドレア・レンボ師のキリスト教美術講座の「Cappella Redemptoris Mater」（償い主の母礼拝堂）壁画シリーズの最終回（4 回目）」を聴講しました。

今回は、マルコ・イワン・ルプニック作品の左壁「イエスの昇天と聖霊降臨」、正面の対面（入口側）の「イエスの再臨」の解説でした。右面の「イエスの受肉と受難と復活」が地上に下りてくる神の愛の実践が描かれているのに対して、左面は昇天するイエスを中心に聖母マリアと弟子たちに聖霊が降臨する場面。左右に人々の物語が描かれて、それらすべての人がイエスと共に上へと昇っていくよう。

物語は、下から、夫婦・家族の愛の姿ときサマリア人の隣人愛、中段にアウシュビッツで殺された哲学者聖エーディト・シュタインと樹をつかんで倒れる聖パウロの殉教、上にイエスの墓に駆けつけたマグダラのマリアと、イエスに愛しているか尋ねられるペトロなどの弟子たち。

背面の「イエスの再臨」は、「愛」の裁きのためにこの世に帰ってくるイエスを中心に、旧約聖書のモーゼの出エジプトやノアの箱舟の故事が描かれ、新しい創造の世界をもって救われる神のわざを示す。

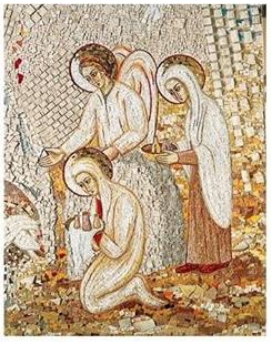
「白い衣を着た人々」は「黙示録」にある救われた人々で「タウ十字」を付けている。一番下には、鍵を持ったペトロが天国へのドアを開けようとしている。

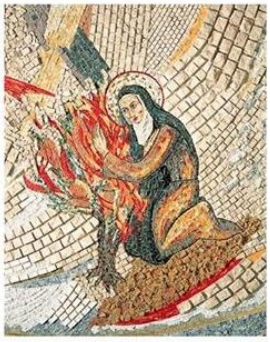
この礼拝堂壁画は、愛と救いの壮大な物語。「ヨハネ第一の手紙」の一章の世界とのことでした。

「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について―このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。この永遠のいのちは、父と共にいま

したが、今やわたしたちに現れたものである―すなわち、わたしたちが見たもの、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる。それは、あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである。これを書きおくるのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるためである。」

「地に下りてくるイエス」に対して、「聖霊降臨と昇天するイエス」は上への動きをあらわすとのこと。





左上：イエスの墓に駆けつけたマグダラのマリア

右上：ペトロたちにに愛しているかと尋ねるイエス

左中：樹をつかんで倒れる聖パウロの殉教

右中：アウシュビッツで殺された哲学者聖エーディト・シュタイン

左下：サマリア人の隣人愛

右下：マリアの両親の愛

「イエスの再臨」

祭壇側からみる礼拝堂の壁画

2019 年 10 月 23 日 ・ 蕨 俊夫

船橋学習センターガリラヤの今日の講座は、久しぶりのアンドレア神父の美術講座です。今期のテーマ「神の救いと芸術」の第１回目。シャガールの絵画を通して聖書における「人間の創造」を読み解いてくださいました。シャガールはロシア出身でユダヤ系、前衛的手法とロシア系ユダヤ文化の土着性を融合した作風で知られます。ナチス政権対応に伴いアメリカに亡命、戦後はパリで活躍しているため多くの作品が残されています。シャガール作品のための美術館もあるとのことです。

今日のお話の中では、大切な指摘がいくつかありました。

シャガールは聖書の物語を作品に取り入れ、さらには「ユダヤ人イエス」を題材にするようになります。実は、イエスがユダヤ人であることは第２バチカン公会議以前には表だって発言できなかったということです。

シャガールが亡命せざるを得なかったナチス流の考え方は、18 世紀ごろからあって、経済的な要因もあるのですが、歴史家はあえて避けているようですが、思想としてはキリスト教の環境がそれを準備したといえるのだそうです。例えば、ハイデッガー、ニーチェといったドイツ民族を取り戻そうとする運動に加担した思想家の存在です。

シャガール作品には、イエスのイメージにユダヤ教のしるしを取り入れている特徴があります。その例として、今日の絵画作品「創造」(1956-1958)の右上、祈りの場面に 7 本のロウソクが描かれています。

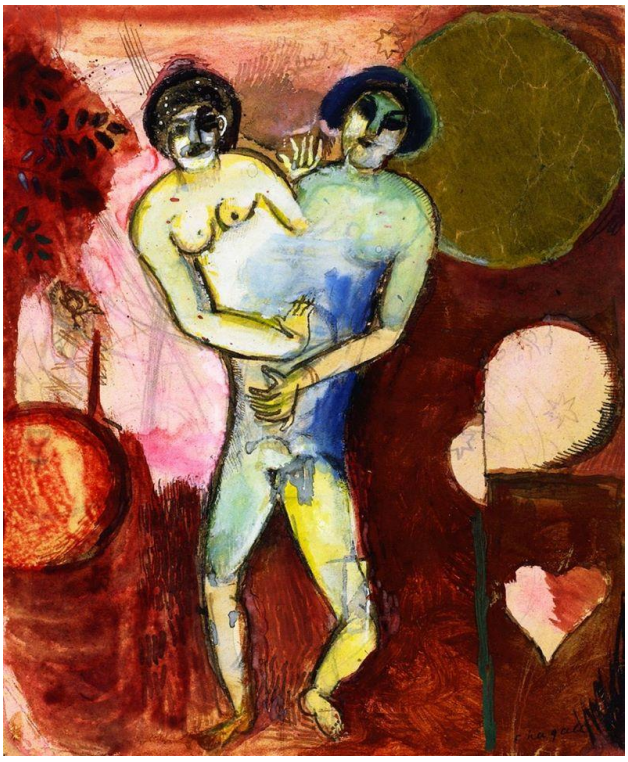
実は、福音書でイエスがユダヤ人と対立しているのは、すべてのユダヤ教ではなく、一部（パリサイ派）であり、彼らが神様から離れていると批判したのです

実は、私たち自身もまた「ユダヤ人」なのですとアンドレア神父はおっしゃいました。根元のところにユダヤ教があるのです。「新約」「旧約」という表現は誤解を招くの、「第 1 契約」「第２契約」

とする方が正しいとのご指摘も新鮮でした。

『創世記』が編集されたのはイエス誕生より200 年も以前で、それぞれ別の系譜を持っています。アンドレア神父は、第 1 章から第 9 章までを 3 つに分けられます。①第 1 章第 1 節～第２章第４節②第２章第５節～第３章③第６章以降

①はおそらく最後に書かれており、「光あれ」から始まるように、イメージがつかみにくいのですが、それに比べて②は神のイメージがつかみやすい。①では一緒に男と女が作られたが、②では最初に男が作られています。しかも粘土で作るのです。シャガールの「アポリネールへのオマージュ」では、アダムのわき腹から創られているイブの左手がアダムの心臓にあたっています。男と女は一緒にいるがよいとのメッセージのかなり具体的は表現ですね。この作品ではシャガールならではの青の使い方にもにも注目しておきたいようです。今回も、大変刺激的な講座です。次回も楽しみです。



2019 年 10 月 30 日　·蕨 俊夫

船橋学習センターガリラヤの今日(10 月 30 日)の講座は、先週に引き続きアンドレア神父「神の救いと芸術」、シャガールの絵画を通して「聖書の物語」から「原罪と悪」について問いかけをしてくださいました。私たちは「罪」にとらわれすぎているのではないか、という問いかけです。私たちにとって大切なことは、神のイメージを伝えることだと、神父様は強調されました。今日のお話はかなり難しいですが、先入観にとらわれず考えることが求められています。

「創世記」の３つの創造の物語が①第１章第１節～第２章第４節②第２章第５節～第３章③第６章以降と３つに分けられることは先週、お伝えしました。

シャガール作品「創造」では、太陽の周りを風車のように勢いよく廻る創造の力が描かれています。アンドレア神父は、神は踊りながら全世界を創られたと表現されました。神は、はじめに言葉を作り、その言葉を用いて「光あれ」と発したのです。ヨハネによる福音では「初めに言（ことば）があった」と記されています。ところで神は何のために人をおつくりになったのでしょうか。それは愛のためでした。十字架のイエスは、神のイメージを伝えています。

「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。 御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています。また、御子はその体である教会の頭です。御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、すべてのことにおいて第一の者となられたのです。 神は、御心のままに、満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせ、その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。」（コロサイの信徒への手紙　第１章 13-20）

イエスはすべての出発点であり、この世の全体を表わしています。シャガールは、この箇所から学び作品化したと考えられるそうです。イエスの十字架は神の御業の頂点であり、人間の究極の目標を示すものです。すなわち愛のために人生を捧げることです。十字架は永遠の命の門に他なりません。見た目では、十字架は暴力の道具の象徴ですが、人間の救いの道具になったのです。シャガールは、キリスト教徒ではありませんが、教徒の芸術家以上に、イエスの十字架に人生を捧げました。それはイエスもユダヤ人であったからにほかなりません。アンドレア神父のこうした指摘・知見は新鮮です。

私たちは、これまで「罪」を強調しすぎていました。洗礼は「罪の赦し」だけではなく、神様のイメージを伝えることにありました。

カインとアベルの物語は、その時代の現実を前にして作られました。人びとは、一緒にいるのではなく殺し合うようになっていました。

③は、ノアの箱舟の物語です。神は後悔しています。神も、人間の悪業に苦しんでいるのです。そして神は、自分が作ったものをこわしてしまいます。シャガール作品は神が壊した命とともに、新しいいのちの誕生を明るく表現しています。

さてシャガールの生きた時代のことです。自分たちは選ばれた民なのに、神は自分たちのことを守ってくれないという、ユダヤ人たちは思います。ユダヤ人にはたびたび起こったことでもあります。しかし、神が私たちを忘れても、自分たちは十戒を守っているように神様を忘れません。これがユダヤ人の信仰の強さです。

ユダヤ人たちは迫害されるとは思っていなかったところ、大事件が起こります。それが 1938 年 11 月 9 日の水晶の夜です。ユダヤ人たちもはっきり気づかされたのです。

シャガールの「白い磔刑」ではイエスを中心に描かれ、すべての世の苦しみをイエスが背負っています。イエスは明らかにユダヤ人です。十戒の板や、ダビデの星のしるしが描かれています。神は人間を捜しに、人間は神を捜していますが、描かれるのは神と人間の出会いです。戦争になって、神は契約を忘れてしまっていることに対して強いアピールをしています。ユダヤ人の家が傾いているものの壊れていないのは、信仰の強さを表現しています。イエスは十字架につけられても苦しみの表情ではありません。救いと希望のメッセージを伝えているのです。暴力の真ん中にイエス様がおられます。

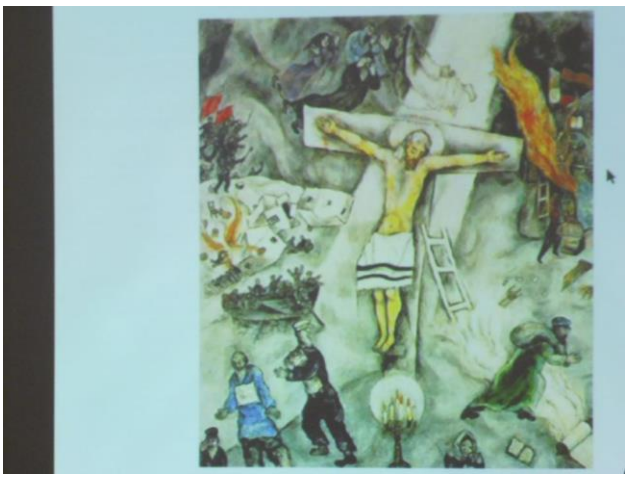
「神はその嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。」（出エジプト記第２章２４節）

神さまが沈黙するとき、神のイメージを守るのは人間です。

アンドレア神父は最後に、習志野教会の堅信式に森司教が来てくださった時の説教に言及されました。心に響くお話でした。すっかり忘れていましたが、実は、私のブログで報告していました。ご興味ある方は参照してください。

「堅信式に思う」

http://blog.livedoor.jp/sawarabiblog/archives/52078497.html



2019 年 11 月 27 日

今日午前中は、船橋学習センター「ガリラヤ」でアンドレア・レンボ師の美術講座「神の救いと芸術」を聴講してきました。

マルク・シャガール（1887-1985）の作品についての全三回の講座で、私は 1～2 回目は参加できず、最終回の今回のみの受講です。

来日された教皇のミサの興奮と余韻がまだ冷めやらぬ中の講座で、まずは、教皇来日中、プレスセンターで欧州向け放送での解説や各国報道担当との通訳などで活躍されたアンドレ師の興味深い裏方の苦労話（ほんとはこの話がもっとお聴きしたかった！）などお話いただいた後、1 回目「人間の創造」、2 回目「原罪と罪」の復習、そして今日のテーマ「福音の受難と復活の物語」の本題に入りました。

シャガールは、パリの前衛芸術運動に参加、前衛的手法とロシア系ユダヤ文化の土着性を融合させた作風のロシア出身ユダヤ系画家で、ナチスの迫害からアメリカへ亡命、戦後パリへ戻り“20 世紀を代表するユダヤ人画家”として評価されたとのこと。

今日のテーマの作品は、「抵抗」・「復活」・「解放」の三部作です。

朗読された福音は「コリント 2 章 4-6～15」の「私たちは、宝＝神の栄光を知る知識を、土の器の中に入れている。迫害されているが、見捨てられることはなく、滅びません」

ユダヤ教徒のシャガールは、ユダヤ人としてイエスの受難と復活のキリスト像として描いていますが、それは、ナチスによるユダヤ人虐殺という現代の受難と復活、そして解放の歴史を物語る作品として描いています。

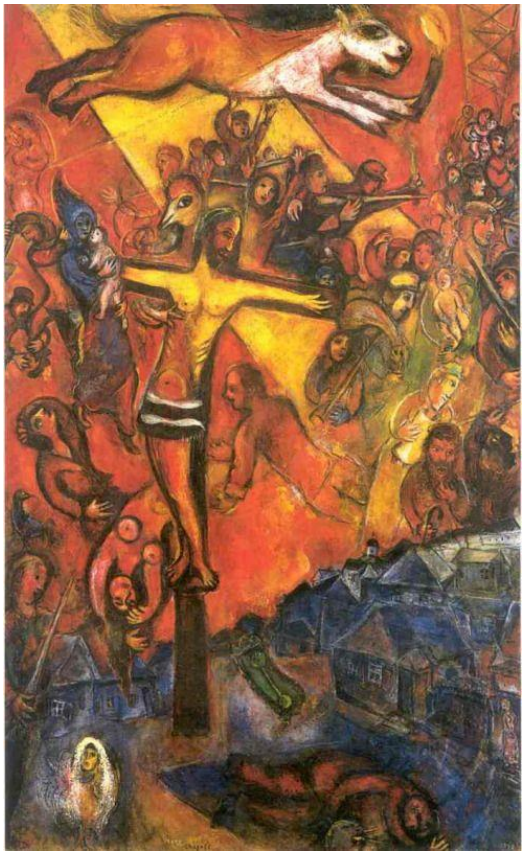
1 作目「抵抗」の絵の左下の小さな光の中の人物、次の「復活」の絵では中央左に灯火（聖体を安置する聖櫃の灯）、そして 3 作目「解放」では輝く太陽となり、白いドレスの花嫁をだく花婿が「ソロモンの雅歌」の人間の愛の姿として描かれています。

イエスの受難に新しい命が与えられ、この世の苦しみも終わり、よい時代になったことを歌う絵です。

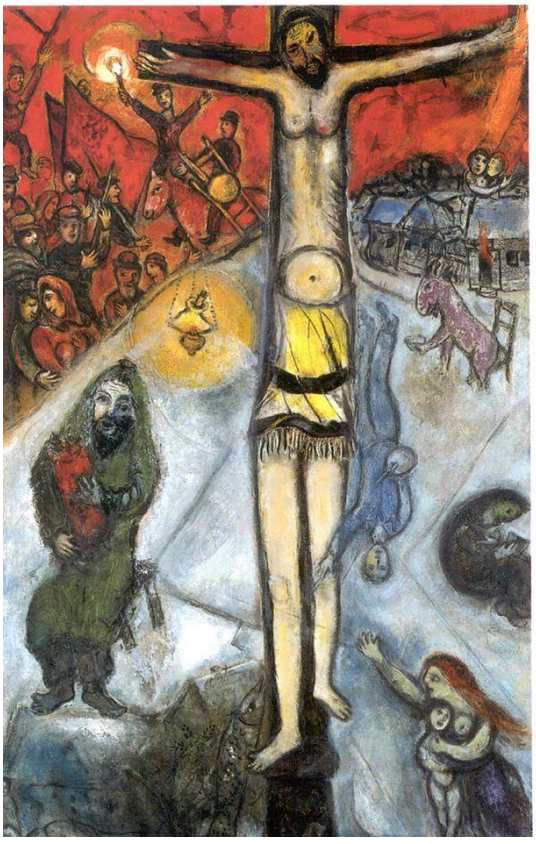
でもその第二次大戦後の「よい時代」は、今どうなんだろう。アンドレア師は今回の来日で教皇の述べた「第三次大戦」の言葉に注目されて、今日の講座を終わりました。

シャガールの三部作、2 作目の「復活」に描かれた灯火について解説されるアンドレア師

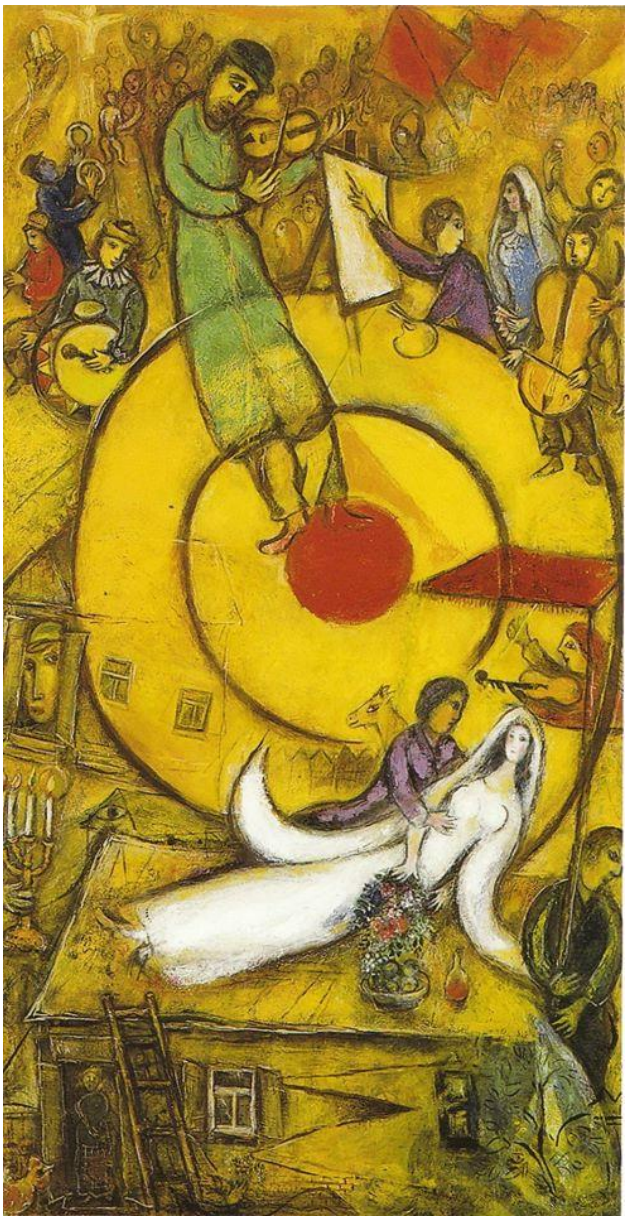
シャガールの三部作「抵抗・復活・解放」
1937-1948　ポンピドー美術館蔵



Resistannce（抵抗）



Resurrection（復活）



Liberation（解放）